

## へ占領との遭遇

— 石川淳「黄金伝説」における戦後受容 —

黄 益 九

### 一 はじめに

石川淳「黄金伝説」は、敗戦の結果、人々にとって政治的にはもちろん心理的にも、いまだ「虚脱<sup>1)</sup>」と「不安」の状態が続いていたと思われる昭和二年『中央公論』（同年三月）に発表された。石川淳の「新しい出発」という期待をうかがわせる戦後第一作として知られている。

小説内容は以下の通りである。敗戦前後の三四ヶ月が小説内の時間だが、その間の「わたし」は、時計の修繕、戦闘帽ではない帽子の購入、懸想する女性（「女人」）との再会という「三の願」を求めて日本中を駆け回っていた。しかし敗戦を体験し、「絶望」の状態で東京に戻ってきた。年が暮れようとする際、時計は「どうやら順調にうごく」ようになり、戦闘帽とはまったく異なる鳥打帽をも見つけることで二つの願いが間に合うようになった。そして、横浜のバラック店で懸想していた女性とも再会するというあらすじである。

筋立からもわかるように、「三の願」のそれぞれのモチーフがテキストの中でそれぞれにアレゴリー（寓意）の意味作用をもっていることは十分推測できる。このテキストのアレゴリーということは、従来の研究でもよく問題にされて来た<sup>2)</sup>。特に、三つ目の願いである「女人」の問題は先行研究が最も注目してきた論点である。その主要な研究の流れを見てみよう。まず、高野良知は「絶望」という概念を取りあげながら次のように述べている。

この作品の末尾の描写は暗くなく、時計と帽子については、それこそ未来への明るい光を投げかけているように描かれているが、それだけに、かの「女性」との断絶がよりきわだつて強調されているように見受けら

れる。作者石川にとって、人間の精神の問題は、それこそ絶望でなくて何であろう。石川の戦後文学においては、絶望こそが、その出発であったのである。<sup>(3)</sup>

「女性との断絶」がそのまま「絶望」という「人間の精神の問題」と等価物だとされている。この小説の主題をこの点に求めすぎたために、それ以外の「時計」と「帽子」に対するアレゴリーの問題はやや度外視されているかに見える。また本論文の立場からいえば、確かに「末尾の描写は暗くなく、むしろ明るく描かれている点においては「絶望」よりかえって「希望」を期待すると読み取るほうが妥当かに思われる。この点で福本政司の見解は高野説とは対照的である。

「黄金伝説」中の女人が「わたし」によって絶望の対象としてみなされ、それが「わたし」の復活をもたらす、という見方への疑問が一層強まって来ざる得ない。(中略) 作者は女人の変貌を肯定的に描いているのではない。良家の出のしとやかな夫人が戦後外国兵相手の娼婦として生きる。一見落魄とも見えるその変貌は、他の女性像との関連からすれば、戦後を生き抜こうとするしたたかな強さを意味するとも考えられる。末尾における「わたし」の鮮やかな復活はそれに触発されてもたらされたのではないか。<sup>(4)</sup>

「女人」の変貌は「絶望」の対象ではなく、「わたし」の復活を触発する肯定的出来事として捉えられている。敗戦後の混乱した社会をたくましく生き抜こうとする女性の姿は、「わたし」の生きるべき方向を示唆するきっかけの役割を果たしているというのだ。さらに、この解釈を一步進めるかたちで山口俊雄は、「女性のふるまい」から見て「敗戦、被占領を機に起こった国家レヴェルでの支配・従属関係の混乱を縫ってむしろ積極的に生き抜こうとする正気な女性である<sup>(5)</sup>」と評価している。

否定的であれ肯定的であれ、確かに「女人」の変貌は「わたし」に大きな影響を与えていると言えよう。しかし、物語展開の全体像からみると、「女人」の変貌そののみが独自に「わたし」に影響をもっているというよりも、この物語の背景となる「占領」という同時代の政治的・文化的要素が絡みあった結果として、その影響力が発揮さ

れるような構造になっていると考えられる。つまり物語展開上「わたし」にとって「占領」という出来事は、物語そのものに書き込まれているわけではないけれども、けっして無視できない状況としてテキストの「読み」を規定しているのである。小説の構造がこのように考えられるとすれば、従来の先行研究は「時計」、「帽子」、「女人」の三つのモチーフについては論じているものの、それらのアレゴリー性を検討するにあたって、「占領」という概念をまったく欠落させているといわざるをえない。というのは、テキストに布置されたモチーフはそれぞれが異なる意味として独自に機能しているように見えるが、物語の全体の構造から見ると、それぞれのモチーフは占領下の「わたし」を中心とした連繋的な意味作用がうかがえるからである。

本論はこのようなモチーフの意味作用を作品分析を通して検討し、その上に同時代的な政治・文化空間との関連を検討することを試みる。敗戦という時代状況が一人の作家の文学テキストに多大の影響を及ぼすことは言うまでもないが、そのことはけっして敗戦だけが問題ではなく、そこには多かれ少なかれその次に訪れた「占領」という状況が同時に作用していることは看過できない。そういう意味で、同時代の文学テキストや知識人の言説が敗戦とともに訪れた「占領」をどのように認識し、受容しようとしていたのかということは、敗戦と占領という事態・状況の激動期を考察するにおいて重要なポイントになるであろう。

## 二 焼け跡の「わたし」

数次にわたる東京を目標とした大規模空襲によって焼け出されてしまった「わたし」は、「変化することを忘れてゐる」焼け跡の中をそれでもさきほどの「三の願」を抱きつつ走り回っていた。その「三の願」の対象を考えてみると、全てが戦争をきっかけとして引き起こされた出来事だった。空襲による火災の夜から狂ってしまった「懷中時計」、火災の夜にやむを得ずかぶった「戦闘帽」、そして東京から焼け出されてしまった消息が分からなくなった「戦争未亡人」（女人）。つまり、これらの三つの対象はどれも不幸なことに戦争を原因として引き起こされた。こうなると、当然のことながら「わたし」の願いの方向は推測することができよう。テキストに描かれている「三の願」は、敗戦から占領期という時間の経過のなかで少なくとも「わたし」が戦争と占領をどう受

け入れようとしているのか、そんな課題を託したモチーフとして働いていることが分かる。

では、このような「三の願」の対象であるそれぞれのモチーフのアレゴリー性を、テキストと時代状況の相関のなかで考察していくことにする。

## 1 断絶する「わたし」

まず、第一の願いである「時計」を見てみよう。

もともとこの時計は火災の夜からすこし調子がおかしくなつてゐたもので、一日に三度ねちを巻くことに依つてどうやらうごかして来たのであつたが、あたらしい打撃を受けてのちはそれがますます狂ひ出して、一日に四度ねちを巻いてもなほ澁りがちなので針の進行を要請するためにはときどき手でつかんで振らなくてはならぬやうになつた。(五六頁)

「時計」が戦中から動いたり止まったりする。特に敗戦を告げる八月十五日の列車の中でラジオの玉音放送があつたことを契機に一層狂つてしまう。この「時計」を修繕してくれる確実な時計職人を見つけ出すことが「わたし」の第一の願いである。この「時計」のアレゴリー性について高野良知は時計が時間の永続や断絶などにつながっているものとみて、時間の限らない連続としての歴史というものが時計によって表されているものと論じている。<sup>9)</sup>

確かに、戦中から狂つていて一日三、四度のねじ巻を必要とする「時計」の針の動きを止めることなく、動き続けるよう戦後まで要請し続けていた「わたし」の行為は、まぎれもなく時間の連続の要請を表わしているとも考えられる。しかし、「時計」に対する「わたし」の態度は戦後になると一変していく。

そろそろ昼の弁当を食はうかとおもつたときには、ちよつと立ちどまつて、ふところの時計を出して、針を

くるとまわして十二時に合はせればよい。わたしといふ存在がおの風土に於ける振子になつたあんばいで、わたしの時計はグリニッチ天文台の時計にくらべてあまり大きい誤差はないだろう。つまり、わたしはもはや時計修繕のために確実な職人とか正直な人間とかをさがす必要がなくなつたといふことになる。(五九—六〇頁)

時間の基準なるものを時計のきざむ時間ではなく、ほかならぬ「わたし」自身に求めていることがわかる。これは、戦時体制下において「集団／共同体の時間」<sup>9)</sup>概念に吸収されていたはずの「個の時間」を甦らせる瞬間として読みとれる。つまり、重要なのは「時計」そのものが意味する「集団／共同体の時間」よりも、自らがその中心に存在しようとする、その発想の転換により注目すべきであろう。しかも時計は狂つていた。これは狂つてゐる時計の連続から逸脱しようとする「わたし」の願いである。狂つてゐる時計のアレゴリー性とはまさに自己が戦前に吹き荒れた狂気のフアシズム(全体主義)から脱却したことを意味する。これは戦前・戦中の時間からの距離を示す「わたし」の意志表明にほかなるまい。つまり、第一の願いである「時計」には、「わたし」の戦前・戦中の時間、すなわち個が全体に埋没していた狂気の時間との断絶を告知する一方、個の自由を謳歌する新たな時間がきざまれる戦後への願いが表われているのである。

次は第二の願いである「帽子」を検討してみよう。

わたしは以前もつてゐた黒のソフトを焼いてしまつて、わづかに火災の夜にかぶつて出た戦闘帽ひとつあるばかりだが、この異様なかぶりものを永遠にあたまの上に載せてあることは好まないで、中折帽なり鳥打帽なり、真人間のかぶる帽子をどこかの店で見つけたいとおもつた。(中略) 帽子はどの地方のどの店をさがしても戦闘帽よりほかのものは売つてゐない。真人間のかぶる帽子をもとめることは真人間の頭脳に出逢ふこととおなじぐらゐむつかしかつた。(五七頁)

ここでは、空襲による火災の夜、戦中から余儀なくかぶされていた「戦闘帽」というものを戦争が終わつた戦

後の現在まで引き続きかぶらざるをえないことになっている様子がうかがえる。「戦闘帽」が戦時体制下の遺産である<sup>(3)</sup>ことを想起するなら、戦後になっても状況や自己の精神状況は戦中の状況が引き続いていることが読みとれる。もちろん戦中／戦後の錯綜している敗戦直後の社会状況からみるとそれも当然なことであるが、だからこそそこから抜けるための「わたし」の意志、願望はより強く作用していたであろう。なぜなら「わたし」はすでに「戦闘帽」を指して「異様なかぶりもの」として言い捨てているからである。この「わたし」の心理を十分考慮に入れながら、やつと見つけ出した新しい「鳥打帽」に関する叙述を見てみよう。

小間物屋の店さきにあたらしい鳥打帽が二つ三つならんでゐるのを見た。わたしは初めそれが飾物ではないかとおもつたが、売物だといふので、さつそくひとつ買つてかぶつた。れいの戦闘帽はどうに投げ捨てしまつて、わたしはその後帽子概念を充実させるやうな現物はなにもかぶらずにすませて来たのだが、今はかぶらずも、あたらしい、まともな恰好のかぶりものをあたまの上に載せると、ちかごろ製造の決してよい品物であるはずがなかつたとはいへ、それでも心たのしかつた。(六〇頁)

高野良知は「戦闘帽」を棄てて新しい帽子を被るというこの行為を指して、「新しい社会や生活の安定に向けての願望」であると指摘している。これをもっと限定して言う、国民服とともにかぶっていた戦闘帽は、戦時中あるいは戦前の雰囲気をも感じさせる服装である。これを自ら投げ捨てようとして走り回るといふ意識の中には、戦前・戦中の服装（意識）からの脱却を告げようとする「わたし」の希望が大きく働いている行為であると思われる。

もしこの行為が戦時体制下で行われたとしたら、「わたし」にはおそらく「非国民」というレッテルを貼られ、「恥」または「罪」意識に苦しんでいたであろう。しかしいまや「わたし」は、そういう「恥」や「罪」をまったく意識していない。「わたし」は自らすすんで戦前の束縛状況からの脱却を表明しようとしている。

このような読みを前提とすると、「時計」も「帽子」も「わたし」自身が常に身につけるものであったが、敗戦を契機にその本来の機能や意味を失ってしまったということになるだろう。いまの「わたし」は時計の狂いを

直し、新しい帽子を手に入れようと走り回っている。その心理には、戦前・戦中の姿との連続を拒否する「わたし」の戦後の期待がたゆたっている。それゆえ「時計」と「帽子」は、「わたし」の戦後への希望をこめた重要な喩的モチーフとして位置づけられる。このことは「わたし」の別の行為からも確認することができる。

この旅がわたしを疲労させた所以のものは（中略）今日の世の中全體のうへに壓しかぶさつてゐるところの途方もない罪の観念のしわざだといふこと、おのれの髓に疵をもつと否とに拘らず課せられた罪の観念の重量からはたれも無疵には逃れ了せないやうな運命の所為だといふことを、わたしは道中つとにさとつてゐた。やけどするほどあつい湯を浴びて虱と煤煙とを洗ひ落とすと、わたしは三四ヶ月ぶりにさつぱりして、うつつあしかつた肩のこりもしぜんと軽くなつたやうであつた。けれど、罪とは煤煙のやうにふりかかつて来るもの、虱のやうに傳染して来るもの、古代印度の信仰のやうに罪は物質にちがひない。（五八―五九頁）

長い戦争が敗戦を迎えて終わると、途方もない「罪の観念」が人々のうえに「壓しかぶさつて」くる結果になり、たちまち社会全体は重苦しい鬱屈気の中に沈み込む。自分たちの責任として敗戦と占領をもたらしたという罪意識、戦争責任から来る戦犯意識、一気に乱れたモラル。これらが結合する形で当時の人々は苦しんだのである。

実際、敗戦直後の八月三〇日付『朝日新聞』には「軍官民総懺悔の要あり」という見出しで次のような記事が見られる。

この際は軍官民、国民全体が徹底的に反省し懺悔しなければならぬと思ふ。全国民総懺悔することが、わが国再建第一歩であり、わが国内団結の第一歩であると信ずる。

この記事は、戦争の敗因をめぐる記者とのインタビューでの、当時の首相である東久邇稔彦の答えである。いわゆる全国民に対して「一億総懺悔」を説いた内容として知られている。この言い方は敗戦直後の人々が背負わ

ねばならない罪意識に大きく影響したに違いない。このような時代背景を考慮すると、テキストの「わたし」は、国民全体に罪意識が溢れているという社会的雰囲気の中を三四ヶ月にわたって旅していたということになる。

行く先々で感じざるをえない「罪の観念のしわざ」という重圧の下で疲れ果ててしまい、東京に戻ってきた「わたし」は、まず身につけて来た風と煤煙を洗い落とす。それだけでも「わたし」はまるで「罪の観念」をたたき落としたかのようなさっぱりした気分を味わうことになる。もしもこの行為が「わたし」の罪意識に対する脱出行為として置き換えて解釈できるならば、「時計」と「帽子」のモチーフはまさに「わたし」が過去の戦争、そして敗戦後の罪意識から断絶しようとする行為に違いあるまい。このテキスト内の「わたし」には明らかに戦前・戦中の連続としての戦後を拒否あるいは否定する姿勢が刻み込まれている。

## 2 逆行する「わたし」

ところで、第三の願いである「女人」はこれまでの二つの願いとは異なっている。そこでは彼女がどのような意識をもち、かつまた現在の彼女を通してどのように映し出されているのかを考察してみよう。

敗戦前後、三四ヶ月の間「わたし」は戦中に恋慕していた「女人」を、日本中を走り回って探し出し、再会することを願っていた。一見すると、「女人」に対するこの願いもまた戦争に原因する別れによって抱くようになったとすれば、他の二つのモチーフと同様に解釈できるかもしれない。しかしそうではなく、この「女人」との再会の願いというモチーフは前述して来た「時計」と「帽子」のそれとはいささか異なる位相を保っているということに気がつく。「時計」と「帽子」に関する希望は、戦前・戦中からの変化や断絶を求めているのに対して、「女人」に対する再会の願いはむしろ戦前・戦中と変わらない、またはその連続のままにとどまってほしいという面が読みとれるからである。

そこで「わたし」と「女人」の再会の場面を見てみよう。「わたし」は横浜のバラック店で「女人」と偶然出会うことになり、その様子を次のように確認することになる。



ハンドバッグのなかには、たばこのほかチョコレートその他この国の産とはおもはれない品物がいっぱい詰まっているのを、わたしが見るともなく見ると、どう、お入用なら頒けたげるわよ。(中略)今どちらにお住ひですかときくと、判つてるぢやないかといふふうに、投げた調子で、ハマよ。

ことばづかひといひ、なりのこしらへといひ、物腰恰好といひ、良家の出のひとつもおもはれず、また火災で夫と家とをうしなつた悲運のひとつも見えなかつたが、今ハマと発音したそのひびきの、おもひなしか、あたかもホンモクといったかのやうに、そしてそれが本牧の一部の特別地帯を意味したかのやうに聞きとれたのに、わたしはどきりとして、わが眼をわが耳をうたがつた。(六一—六二頁)

おそらく「わたし」の再会しようとした「女人」とは、以前に逢つた時は「良家の出」の気品のある女性だったはずだった。しかし「わたし」がゆくりなくもふと出会つたときの「女人」の様子は、「わたし」の眼を疑うほどうつつが変わつていた。しかも、「特別地帯」と呼ばれる横浜の本牧に住んでいるという事実も確認することになる。「特別地帯」というのは、言うまでもなく敗戦直後日本に上陸して来る連合軍(主にアメリカ軍。当時はこれを「進駐軍」と呼んでいた)の「進駐軍慰安施設」が設置されている一帯地域で、日本人が入ることを許されない地域を指していた言葉である。資料からみても、たしかに当時の本牧は「進駐軍慰安施設」の設置場所として指定されていた。そのことは、一九四五年八月三〇日付の『朝日新聞』朝刊が連合軍の横浜上陸に合わせ、「進駐軍の慰安施設」の設置方針を記事にしていることから確認できる。

慰安所を設置する地區 (中略) 大丸谷、本牧までの間を設置場所に指定してどし／＼許可する方針である  
(横浜)

つまり「わたし」の懸想していた「女人」は、占領軍相手の娼婦になっていたわけである。しかし、このような「女人」の大きな変貌にもかかわらず、「わたし」の期待は相変わらず戦前・戦中の「女人」の記憶にとどまっている。次の引用を検討してみよう。

わが眼にのこるこのひとのすがた、わが耳にのこるこのひとの声はただ一つしかない。それはずつと遠いむかし、つまり一年ばかりまへのことである。(中略) お足もとにお氣をつけ下さいませ、そこを左へおまがりあそばして、それから右のはうへ、といふふうに、ねんごろに声をかけてくれた。(中略) そして、今このバラック店の中でまのあたりに見るこのひとのすがた、まぢかに聞くこのひとの声は、わたしにとつて、やはり、むかしのすがた、むかしの声にほかならず、なつかしく身にしみわたつた。(六二—六三頁)

「わたし」のまなざしは、今の「女人」のすつかり変わった顔や姿のうちに戦前・戦中の「女人」の面影を重ね合わせようとしている。いうまでもなく、そのまなざしは恋慕ゆえである。これは敗戦とともに積極的になろうとする思いとは違って、変わるまいとする「わたし」のもう一つの姿である。この「女人」は「わたし」ととつて「時計」と「帽子」で示してきた意味とは異なっている。時代の変貌に合わせて自分の外見や環境を変化させてきた戦後の「わたし」という人物が、この「女人」との再会の場面においてはあくまでも戦前・戦中の自己のままでいたいという思いをつのらせていることが読みとれる。

これは戦後の「わたし」とはいささか矛盾する姿勢であろう。「わたし」は戦後の時代の大きな変化を理解し、その変化に合わせて生きようと決意しながら、もう一方で、いまだに戦前・戦中の思考にこだわっている。このような相反する「わたし」の人物造形はなにも「わたし」一人だけではなく、敗戦直後の日本人の姿そのものとしても読みとれる。言い換えれば、「わたし」に見られるこの矛盾したありようこそ敗戦直後の時代状況における、断絶されていない、連続している人々の戦前・戦中の意識／思想のありようそのものとしておきかえて考えても差し支えないことであろう。

以上の分析をもう一度まとめてみよう。

「三の願」に現われている「わたし」の戦後受容に対する姿勢とは、当時の社会状況と同様に複雑で混乱している。「時計」と「帽子」に見られるような戦後受容への積極的変貌がうかがえる一方、「女人」に対しては戦前・戦中の意識をそのまま保ち続けようとする心情が見られる。つまり「三の願」は、「わたし」との関係を媒介に

して、単に二人の恋愛関係にとどまらず、同時代状況を垣間見せるモチーフとして機能していることがわかる。そうすると、テキストに見られる「わたし」という存在は、「三の願」のモチーフに託して戦前・戦中から戦後にかけての意識が大きく錯綜する状況の境界を生きる人間なのである。

### 三 占領空間と修辞学

テキストは敗戦前後三四ヶ月の時間と空間を背景として描かれている。これは日本の被占領が始まる時期と重なってくる。当然ながら、テキストがこの占領空間を時代の変化と結びつけて意識していると想定するならば、占領軍はいかなるイメージをともなう日本人に近づいて来たのか、そしてそのことがテキストにどのような反映されているのかを考察する必要がある。

まず、同時代における占領軍のイメージがどのように表象されていたのかを確認していこう。敗戦直後、今まで戦時体制の下で教育／洗脳されていた日本人は、何よりも不安と恐怖に怯えながら占領軍をとらえた想像される。その様子は次の引用からも明確に読みとれる。

無条件降伏という言葉の中身がわからず、昨日まで軍部がおり立っていた「鬼畜米英」の占領軍が日本に上陸してくる、その不安感と恐怖心で、東京、神奈川県方面ではとくにパニック状態がひどかった。

「男は去勢されて強制労働、女は慰安婦にされる」といううわさが飛びかった。<sup>(9)</sup>

日本の敗戦によって余儀なく侵入を許さざるをえなかった占領軍のイメージは、日本人からは破壊者あるいは抑圧者と決めつけられていたのである。

ところが、長年の戦争で抑圧と脅威にさらされていた日本人にとって占領軍は、しばらく時間が経つと、安堵や解放を感じさせる日本変革の主役として現われるようになった。特にこのような見方のよい例に共産党を挙げることができる。共産党は占領軍を解放軍として受け入れながら革命路線の活動を行っていた。小熊英二は占領

軍に対する共産党の態度を次のように述べている。

一九四五年一〇月、占領軍の指令で獄中から解放された共産党幹部たちは、一〇日付で「人民に訴ふ」と題する宣言を発表した。そこでは「世界解放のための連合国軍隊の日本進駐」が歓迎されると同時に、（中略）占領軍の指令で解放されたという経験は、米軍を「解放軍」とみなす規定となつて現われ、米軍の占領下でも平和的手段によつて（社会主義革命はともかく）民主革命は可能であるという「平和革命」路線をもたらした。<sup>91</sup>

引用からも分かるようにGHQの人権指令にもとづき解放された共産黨員は、占領軍を「解放軍」として受け入れ、占領軍の日本占領を歓迎していたことが記されている。このような日本人の姿勢の微妙な変化によつて占領軍は抑圧者としての負なるイメージと解放者としての正なるイメージの両面性を合わせ持つ存在として表象されるようになる。つまり占領軍は、「相反」のイメージを保つたまま日本での占領を行っていたのである。このような背景を関連させるとき、このテキストが占領軍をどのような意味作用をもつものと位置づけているのかを考察してみよう。

戦中の感情を持ったまま「わたし」は「女人」と偶然出会い、そのまま戦中の感情の実現を喜んで「女人」を受け入れようとする。そのために「わたし」は、戦後の「女人」に戦中とはまったく打つて変わった様子を見取ったにもかかわらず、それをあえて認めないかのように行動する。このような男女の関係の変化のなかで占領軍が登場するのはたつた一カ所に過ぎないが、この一カ所は「わたし」はもちろん読者にも最も強烈な印象を与える。その場面を取り上げてみよう。

駅の近くまで来ると、今までわたしに身を寄せてゐたひとは突然ぱつとわたしを突き放して、つい向うへ駆け出して行つた。わたしはよろめく足を踏みしめて、向うを見ると、そこに、ひと兵士が立つてゐた。その黒い兵士はきれいな淡紅色の薄絹のマフラを小粋な恰好で頸に巻つけてゐて、なにやらさげんだその口に、

まつしるな硬い齒ならびが鑛石のやうに光つた。そして、兵士の厚い胸板のあたりに、蝶が木の幹にとまるやうに、赤づくめの衣装をきたひとのからだがびつたり抱きついてゐた。(中略)しかし、わたしの発しうることばとしてはなく、ただ死ぬほどはづかしくなつて、もうなにも判らず、駅前の広場のまんなか、雑多なひとの渦の沸き立つてゐるほうへまつしぐらに駆け出した。(六三―六四頁)

「わたし」は占領軍兵士に抱きついてゐる「女人」の姿を目撃する。その「黒い兵士」が表象する占領軍は「わたし」にとつて思いも寄らぬ衝撃を与えると同時に、戦後の変化を最も自覚させてくれる記号として作用している。そのために、この「女人」に対して、戦前・戦中の思考を連続させようとしていた「わたし」に時間の断絶を強いる媒介として占領軍は登場するともいえる。実際、当時の占領軍の政策は、大きな枠から見ると、日本人の戦前・戦中の思想／思考を断絶させることが最も重要な目標だった。

しかしここで重要な点は、「本牧の一部の特別地帯」という特殊空間の存在を知っていたはずの「わたし」には、自分の思慕し続けてきた「女人」が占領軍相手の娼婦になつてゐるという事実を確認するだけで、かえって「わたし」は「発しうることばとしてはなく」、「女人」への思慕を断念するしかなかったということである。このことは当時の占領軍の両面性と照応している。テキストは占領軍を登場させることによって「わたし」の戦後における変化を見せてくれると同時に占領軍の勝者の奢りを暴き出すことを試みていたと考えられる。このような見方をあらためて作者石川淳にあてはめてみると、当時の検閲事情を知っていたにもかかわらず、あえて占領軍表象によつてテキストにある一定の意味作用を及ぼさせたということは、当時の読者にこの二つの問題を同時に理解させることができると考えたからであらう。

しかし当時の出版検閲状況を考慮してみると、占領軍関係の言及は編集者にはもちろん作家にも危険きわまりないことであつた。これについては、横手一彦の『被占領下の文学に関する基礎的研究 論考編』に収集されている数多くの掲載禁止・削除理由の類型<sup>(1)</sup>を参考にすれば、当時の検閲状況がどれだけ厳しかったのが十分想像できる。その中で二四番目の「占領軍将校と日本人との(男女の)親密な関係描写(Fraternization)」の項目は、テキストに直接関わる内容であらう。実際この「黄金伝説」は、作品が発表された同年の十一月にあらためて短

編小説作品集『黄金伝説』（中央公論社発行）に収録されるはずであったが、当時の厳しい検閲によって削除されて収録されず、作品集の書名としてのみ付けられるようになっていた。この際の未収録経緯と削除理由を横手一彦は次のように推定している。

初出「黄金伝説」が、流布版『黄金伝説』に収録されなかった事情には異本の発生を極度に嫌った作者の意志に拠るものと推定する。作者が戦時中とは異なる個の想像力の十全な表現形態に拘ったため、結果、異本の発生と伝播を未然に防ぐことになった。このことに表現者としての真意があったのである。<sup>(11)</sup>

削除理由を「FRATERNIZATION」と推定する。（中略）このように、強権的な他律的力学によって占領軍將校と敗戦国の若い女性との交際を活字表現の紙の上で禁止することが出来たとしても、現実にある様は何が起こっているのか想像しなくても容易にその内実を判別させた。<sup>(12)</sup>

これらの資料によれば、作者石川淳は、当時の検閲の厳しさを十分に認知していたと思われる。しかしそれにもかかわらず、検閲事情に真っ向から対抗していくかのような表現を埋め込んだ作品を発表した。その結果は案の定作品集への未収録というダメージを受けたというのである。石川淳は、むしろ「黄金伝説」の中の占領軍表象にこだわっていたことも推測できる。

考えてみると、テキストに表象される占領軍は「わたし」の矛盾する戦後受容の問題を極端な形ではあるが整理してくれる存在であった。言い換えれば、「わたし」に戦後の現実を直視することを強いる媒体がほかならぬ占領軍だったのだ。占領軍は「わたし」として敗戦国民としての屈辱を認めさせる何よりも適切な存在であった。このような意味作用を持つ占領軍は、当時の社会状況からみると、悔しいという感情を最も刺激する究極の形で表わされる。その現象が「わたし」の「ただ死ぬほどはづかしくな」る原因になるのであろう。

結局石川淳にとって占領軍は解放／破壊の両義性をもって表象されるといった、正／負の両極端のイメージで現われてくるものだった。「わたし」には敗戦直後の占領期に抱いていた公／私の問題を覚醒させる究極の表現記

号としての役目を果たしていたと考えられる。

このような記号性を石川淳の修辞学として認めるかどうかはさておくとしても、確かに石川淳の戦後小説には、「黄金伝説」に見られる占領軍のように相反するイメージが作品の重要な位置を占めているものがある。その例に「黄金伝説」と同年の『新潮』一〇月に発表された「焼跡のイエス」が挙げられる。

その無言の格闘の中で、わたしはからうじて敵の手首を押さへつけることができた。ひどい力で、すばやくうごく手首である。しかし、それはおもひのほか肌理がこまかで、十歳と十五歳の中ほどにある少年の、なめらかな皮膚の感觸であつた。わたしは死力をつくして、どうやら敵を組み伏せた。今、ウミと泥と汗と垢とによごれゆがんで、くるしげな息づかひであへいである敵の顔がついわたしの眼の下にある。そのとき、わたしは一瞬にして恍惚となるまでに戦慄した。わたしがまのあたりに見たものは、少年の顔でもなく、狼の顔でもなく、ただの人間の顔でもない。それはいたましくもヴェロニクに寫り出たところの、苦患にみちたナザレのイエスの、生きた顔にほかならなかつた。わたしは少年がやはりイエスであつて、そしてまたクリストであつたことを痛烈にさとつた。それならば、これはわたしのために救ひのメッセーヂをもたらして来たものにちがひない<sup>95</sup>。

「焼跡のイエス」と呼ばれる少年は「敵」として表現され、「わたし」と格闘している。しかし、その「敵」との格闘は途中で急転する。突然、「わたし」にその「敵」がイエス・キリストに他ならない存在として表われるようになったのである。つまり「敵」＝「メシア」という表現等式が形成されるのである。浮浪少年の顔になぜイエス・キリストの顔が二重映しに見えたのかに関しては定かではないが、「敵」である浮浪少年の顔に「キリスト」の顔を見えるという極端な表現が石川淳に認められることは確かである。言い換えると、「敵」と「メシア」という相反するものが浮浪少年という人物を通して作品に噴き出されている。あるいはそこに石川淳の宗教的心性を読み取つてよいのかもしれない。まさに救済者の待望である。絶望と悲慘の極限に救済を夢見る。それはおそらく敗戦直後の日本人の心性にあふれていたのではなからうか。そのことを石川淳は自身の体感を通して語つたにち

がない。

このように「黄金伝説」の占領軍のもつ相反するイメージが「焼跡のイエス」にも適用されていることが認められる。では、この修辞学が導入されることで「黄金伝説」はどのような結末を迎えることになるのか、あらためて確認してみよう。「わたし」は占領軍兵士に抱きついていて「女人」の姿をあとにして恥ずかしさを感じながら逃げるようにして走り駆けていた。しかし不思議なことに、そのときの「わたし」の内面はとても暗くなっているわけではない。むしろ明るい希望を与えているかのように描かれている。

驅けるにしたがつて、体内の血が活發にめぐりはじめ、筋肉が盛りあがつて、惡寒がやみ、手足たしかに、呼吸をとのひ、からだぐあひがたちまち順調に復して來た。そして、ゆがんだ鳥打帽がいつかきちんと直つてゐて、ふところの時計がきもちよくかちかちと鳴り出してゐた。(六四頁)

「わたし」の「身体」、「帽子」、「時計」はどうやら正常を取り戻しているように描かれている。それは「わたし」の戦後の新しい出発が、拒否できなかった連合軍の占領がまさに存在しているのだという厳然たる事実の受け入れから始まっていることを確認したからであつた。つまり敗戦したことにではなく占領されたことに「わたし」の実存があるという、戦後にかける作者の重い意志をこのテキストから読み取ることができる。

#### 四 おわりに

敗戦直後の混乱期に書かれた「黄金伝説」という作品名はヨーロッパの一三世紀に編纂されたキリスト教における聖人伝説 *Legenda aurea* (『黄金伝説』) を意識して命名されたと従来の研究は論じている<sup>90)</sup>。そして石川淳「黄金伝説」を聖人伝の作品として見た場合、誰が聖人であるかの問題が追究され、その場合によく「女人」に注目が寄せられて來た。そのためにこれまでの作品論の多くはその焦点を当然ながら「女人」の変貌にその理由を探し求めるところに置いていた。もちろんこのテキストにおいて「女人」は欠かせないモチーフである。



しかし、テキストにおける「わたし」と「女人」との関係性をもう一度考えてみると、「女人」の変貌そのものは「わたし」の思い浮かべる過去の記憶によってむしろ克服されてしまうように描かれている。つまり単なる「女人」の変貌そのものが問題ではない。あくまでも「女人」の変貌の背景には、<sup>6</sup>「占領」という決定的要素が関与している。事実、「女人」の変貌には、「良家の出」の彼女の内面や個性を徹底的に破壊してしまった占領軍の存在が何よりも問題化されるべきであろう。実際、『占領と文学』によると「軍事的占領によって政治や経済だけが占領されるのではなく知性や感性までもが占領される」という『知的占領』<sup>7</sup>の問題が指摘されているのである。

このようにみると、テキストに表象される占領軍の登場は、当時の読者に占領の持つもう一つの意味を知らせる最も効果的な記号であることがわかる。しかも、「時計」や「帽子」に託した「わたし」の戦後受容の問題が「女人」との再会で大きく乱れるようになる。ただ、このことは、占領軍の登場によって片付けられていて、そこでおぼえた「わたし」の感慨が戦後受容に関する考え方を貫くようになってしまっている。その意味でいえば、石川淳「黄金伝説」はやはり男性の視点に独占された文学であって、女性とは相変わず見られる他者にとどまっている。このテキストは男の眼に映る<sup>8</sup>「占領」というキーワードを巧妙に取り入れた占領のもつ相反するイメージに敗戦直後の時代状況における作者石川淳自身の戦後受容の姿勢がうかがえるテキストなのである。

本論に引用されている本文は『石川淳全集』第二巻（筑摩書房、一九七四）によるものである。

- (1) 注 ジョン・ダワーは、長年の戦争による疲労と敗戦による絶望感を「虚脱」という言葉で論じている。『敗北を抱きしめて（上）』岩波書店、二〇〇一、三浦陽一・高杉忠明訳
- (2) 日高昭二は、「発想が必然的に寓意を取る」として紹介している（『石川淳作品案内』『国文学解釈と教材研究』一九七五、五号）。そして鈴木貞美は、「寓意の爆弾―敗戦小説を読む』『文藝』一九八五、八月号）という評論で、一語一語がアレゴリーによって成り立っているような作品であると論じながら、作品の設定上に関わることがらと作品の結末に注目していた。
- (3) 高野良知「石川淳―戦後の出発』『芸術至上主義文芸』一九八八、一二、一四卷、七〇頁
- (4) 福本政司「石川淳―黄金伝説二』『学大国文』一九九七、二、四〇卷、八五頁
- (5) 山口俊雄「石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで』双文社、二〇〇五、三二九頁
- (6) 高野良知 同上論文、六六頁
- (7) 成田龍一「時間の近代―国民Ⅱ国家の時間』『岩波講座 近代日本の文化史3 近代知の成立』岩波書店、二〇〇二、三一―九頁
- (8) 戦闘帽は、昭和十五年一月に公布された国民服令（勅令第七二五号）により成年男子が被ることと定められ、日常の服飾として身につけることになった。そして戦中の結婚式にも国民服とともに戦闘帽を被った花婿の姿がよく見られるようになった。
- (9) 山岡 明によると、敗戦直後の時代は「生きていること自体が犯罪の時代だった」と指摘されている。そして当時の人々に法令を厳密に適用すると全国民が罪人であると述べている。『庶民の戦後生活編―戦後大衆雑誌にみる』太平出版社、一九七三
- (10) いのうえせつこ「占領慰安所 国家による売春施設 敗戦秘史」新評論、一九九五、一二頁
- (11) 小熊英二「『民主』と『愛国』―戦後日本のナショナリズムと公共性」新曜社、二〇〇二、一八―六頁
- (12) 横手一彦「被占領下の文学に関する基礎的研究 論考編」武蔵野書房、一九九六、二八―三〇頁
- (13) 横手一彦「『黄金伝説』は二度つくられた」『近代文学論集』二三卷、一九九七、一一、一五頁
- (14) 横手一彦、同上論文、一三頁
- (15) 『石川淳全集』第二巻 筑摩書房、一九七四、一九四頁
- (16) この作品名の命名問題については、高野良知（同上論文）、福本政司（同上論文）、山口俊雄（同上論文）がそれぞれほぼ同様に認めている。
- (17) 『占領と文学』編集委員会『占領と文学』オリジン出版センター、一九九三、三頁